

マエストロと共に音楽の世界へ！

若手の指揮者（マエストロ）として国内外で活躍され、仙台フィルのミュージック・パートナーも務める山田和樹さんをゲストにお迎えし、音楽やオーケストラの魅力について、奥山市長と語り合っていました。



音が温かな仙台フィル

市長 本日はお越しいただき、ありがとうございます。はじめに、世界でご活躍されている山田さんに、仙台フィルの雰囲気や個性についてお尋ねしたいと思います。

山田 仙台フィルの魅力は、家族的なつながり、温かさを感じる所です。例えば練習の始まりに「おはようございます」と言うのは、はつきりとあいさつが返ってくる。当たり前ですが、この業界では珍しいのです。その家族的なつながりが音にも表れていて、温かい。仙台の豊かな自然も影響していると思うのですが、すごくピュアなサウンドが出てきます。

市長 ヨーロッパのオーケストラ（オケ）と比べて、いかがでしょう。
山田 技術的にはほぼ差はありません。違いがあるとしたら、伝統の部分。ヨーロッパでは、小さな村にも教会があって、定時に鐘が鳴ります。倍音といまして、すごく響きがあり、それを生まれるがらに聴いている。日本のお寺の鐘とは響きの質が異なります。そして、教会の中では聖歌隊の歌やミサ曲を聴く。そうして育まれる土壌は、どうしても違います。また、スポーツに例えるなら「日本の選手は組織力、欧米の選手は個人力」というところがあります。



山田和樹さん
仙台フィルミュージック・パートナー。指揮者の登竜門として名高いブザンソン国際指揮者コンクールで平成21年に優勝。現在、スイス・ロマン管首席客演指揮者、モンテカルロ・フィル首席客演指揮者、日本フィル正指揮者などを務める。ベルリン在住

人間力が試される指揮者

市長 最初にヨーロッパで指揮されたのはお幾つのおときですか。
山田 僕は遅かったんです。コンクールで優勝したのが30歳で、それまではずっと日本にいました。
市長 ヨーロッパで、技量やオケにプライドを持つ演奏家たちに、指揮者として自分のやりたい音楽



を伝えるのは難しいでしょうね。
山田 その点は大丈夫ですが「お国もの」の扱いは難しい。例えばフランス音楽を、フランスのオケが演奏するのは特別なことなんです。自国の音楽は自分たちが一番知っている、という思いがある。僕だけが外国人で、日本に置き換えれば「外国人が日本に来て尺八を吹く」感じ。いつもやっているやり方があり、それに触れようとする、かたくなに拒否されます。
市長 料理に例えれば「そのしょうゆじゃなくて、こっちのソースでもおいしいかもよ」と言っても、「いや、だめだ」と。あからさまではないでしょうけれど。
山田 それが、結構あからさまだったりするんですよ（笑）。3回言ってもだめで、4回目ようやく試してくれるとか。それで、良ければずっと受け入れられたりと、独特の吸収の速さがありますね。
市長 それも一つの力ですね。
山田 そうしてフランス音楽を成

功させ、「ああ、これがフランスの伝統か」と確信を得て、その同じ曲をドイツで指揮しようとする、これがうまくいかない（笑）。
市長 正統派オーケストラが演奏するのは、我がドイツの音楽だという自負心があるわけでしょうか。
山田 そう。フランス音楽の「おしゃれな感じ」というのがどうも出せない。国の違いは難しいですね。オケとのコミュニケーションは、僕は外国語が得意ではないので、身振り手振りとか、テレパシーの部分で伝えます。オーケストラという集団は特にテレパシー能力が高く、指揮者の頭の中で鳴っている音が、何かを通して見える。指揮をしなくても分かるというか。
市長 晩年の朝比奈隆先生の指揮を思い出します。
山田 そこにその人がいる、というのが大事なんです。学校でいえば、クラスの雰囲気って、担任の先生がそこにいないかどうかで変わるじゃないですか。先生がガラッと戸を開けて、教室に入った瞬間に変わる雰囲気みたいなものが、指揮者にもあると思います。
市長 存在することの力。
山田 そうなると逆に怖いもので、指揮台に立つと裸同然、見透かされているわけです。

最終的には人間力の勝負で、同じ要求でもこの人なら従ってもよい、と思わせるかどうかなんです。
市長 よく、馬は乗る人に合わせ、能力を発揮するといいますが。この人は上手だなと思うと、すすつと障害を越えて跳ぶ、みたいな。
山田 「ドライブではなくキャリアが大事」とは指揮者・カラヤンの言葉ですが、オケも生きた集団なので、彼らの意思に任せながらも、自分の思いどおりに持つていく。良い指揮者だと、普段うまくいかないところが、うまくいっちゃったりしますから。
市長 人馬一体での跳躍ですね。仙台フィルもこれから、自身が跳ぼうとし、そこに山田さんの音楽に対する思いが乗って、大きな跳躍につながることを期待したいと思います。



仙台フィルとのリハーサル。「震災を経て、一層絆が深まりました。一緒に音楽をつくる時間は、とても幸せです」



せんくら最終日での演奏。ベートーベン「第九」終楽章に続くエルガー「威風堂々」では、山田さんも客席を向いてタクトを振り、観客の歌声も重なった大合唱がこだまする感動的なフィナーレに

震災を機に日本人であることをあらためて考えた

市長 山田さんは、お忙しい間を縫って被災地を訪れ、子どもたちの合唱指導などをされていますね。山田 震災のときはベルリンの自宅にいました。朝、日本から知らせが入って、テレビをつけたら震災の報道ばかりで、これは大変なことになった。被災した方のために何かしなければいけない、どうしたらよいか分かりませんでした。僕は、日本が大変な時に日本にいなかった日本人で、日本人として何かを伝えなければならぬ、でも何を伝える使命があるのか、それが音楽でいいのか、確固たる考えが持たなくて、気持ちの整理に時間がかかりました。市長 日本の私たちも大変でしたが、海外にいらした方々も焦燥感に駆られ、大変だったのですね。山田 「何で自分は日本人なのに海外にいるのか、何で生きているのか」という根本的なことを、自分に問い掛けていました。市長 仙台は被災地の真ん中にある、市民一人一人が折に触れ、震災当時の気持ちに戻ったり、戻らなければならないと思ったり、混乱した思いを抱えています。そうした中で、音楽による復興支援

ラシックには心を打たれなくても、トラックの運転中に聴く演歌で泣けてくる人もいます。音楽の効能としては全く同じです。市長 ある種の感動を呼ぶという山田 クラシックは一般にきれいなものと思われていますが、実際はそうでもないのです。市長 作曲家の人生は波乱万丈だったり、破綻していたりです。山田 でも、音楽は美しい。美しさの裏には醜さがあり、僕は「醜なる美」と表現するのですが、必ず「対」になっている。西洋音楽はフォルテとピアノ、生と死など、

特集

特集

を続けていただくことには本当に感謝しています。今、ウイーン・フィルが5年にわたって、仙台ジュニアオーケストラを指導してくださっていますが、長く仙台に寄り添っていただけるのはうれしいことです。うれしさが、人々やまちにじわじわ染み込んでいきます。山田 子どもたちには未来を託したい、何かを残したいという気持ちで、合唱や吹奏楽などの指導をしています。子どもって本当にピュアな存在で、何かをしてあげようと思っても、結局、僕が力をもらい、勉強もさせられています。昨年10月の仙台クラシックフェスティバル(せんくら)で、締めくくりに「第九」の指揮を引き受けた際、子どものコーラスを入れて



広瀬中学校吹奏楽部での音楽指導

全部「対」でつくられています。一見清らかな中に、どんな毒を見るかという楽しさがあります。市長 山田さんの梓にはまらないところは、指揮者の強みですね。山田 僕は、ピアノを弾くのは好きでしたが、クラシックに特に興味があったわけではなく、演奏会では結構寝ちゃうほうだったんです。だから、クラシックが苦手という人の気持ちが分かります。今でも正直、つまらない演奏だと寝たりすることはあるんですけど。市長 山田さんに寝られたら、演奏する方は青くなると思いますよ。山田 クラシックが伝わらないのは、刺激的だったり、感動的だったりする演奏が打率的に高くないから。指揮者が良い、オケが良いと前宣伝がすごくて、本番では周りが拍手しているのに、良いと思えなかったら「自分はクラシックを理解できない」と考えてしまう。スポーツは結果がはっきり出て、選手は「調子が悪かった」「集中



ほしいと無理を申しまして。市長 あれは新機軸でしたね！山田 僕は初参加でしたし、オリジナルなものと思って。「人類みな兄弟」という歌でもあることだし、大人のパートもソプラノ、アルト、テノール、バスと分けず、ごちゃまぜに配置して、パートも世代も越えた仙台スペシャル版の「第九」をお届けできて良かったんです。市長 素晴らしい演奏でした。

心を打つものが音楽。ジャンルは関係ありません

市長 山田さんは、クラシックを梓にはめず、自由に捉えていらっしやるようにお見受けしますが、幼少のころクラシック専門の環境にいらっしやらなかったのですか。山田 僕は、音楽教育に熱心な幼稚園に通ったので、園生活の中で自然に音感が身に付き、楽譜の読み書きができるようになりました。そして小学3年からは、合唱団に

力が途中で切れて」と正直にコメントします。クラシックも正直でよいと思う。皆さんには最初は苦痛でも、当たりの演奏があるまで聴きに行つてほしい。10回に1回は当たりがあると思います。音楽が羽ばたいて、違う世界に行くような感覚が起るかどうかです。市長 日本人は優しいから、失敗したかも、というときでも、割と拍手が起きますよね。山田 それが、僕が一度東京で観たオペラでは、演出が過激だったこともあり、ブラボーとブーイングが半々でした。ブーイングが出ると、負けじとブラボーが出て。こんな光景は、日本では初めてでした。良い兆候だと思いました。市長 新しい境地へ行くには、聴衆も正直になって、高い期待を発信することが求められるのです。市長 最後に、今後の抱負をお聞かせいただけますか。山田 オペラをやりたいです。演奏に、演出や歌手が加わって、動きが出て、大きな物語性が生まれます。筋書きは大抵どろどろしていますが(笑)、オペラを指揮する独特の感動ってあると思うんです。やってみなければ分からない。だから、飛び込んでみたい。市長 歌が好きなのは人の声の

入って本格的に歌を始めました。市長 そこで、合唱と山田さんの結び付きができたんですね。山田 その先生は面白くて、あらゆるジャンルの曲を歌わせる方針で、演歌も歌いました。市長 演歌を小学3年生が声をそろえて歌うなんて、学校教育的には全く信じられないです！山田 当然、歌詞の意味は全然分からない(笑)。ピアノ曲に適切な歌詞を付けることもあれば、歌謡曲、民謡、ジャズなど、つまりは全部先生の好きな曲なんです。市長 それはすいぶんと自由な(笑)。

山田 それで僕の財産です。クラシックが一番、とは思っていない。音楽は心を打てば良いのです。ク



せんくらでは、仲道郁代さん(ピアノ・右)、神谷未穂さん(バイオリン)とお互いの好きな曲を紹介しあう一幕も



要素でしょうか、言葉でしょうか。山田 人の声というか、歌い回しですね。歌詞が何語であっても、その表現から、感情が伝わります。市長 この方の歌が好き、というオペラ歌手はいますか。山田 「遠い帆」にも出られた小森輝彦さんは素晴らしいです。彼が歌うなら、僕は一生歌わなくてもいい(笑)。他にもたくさんいますが、一人でも多く、世界に羽ばたいて欲しいですね。市長 山田さんは、これからもいろいろと経験なさって、さらに、自分の理想とする音楽を探求していけるのだらうと思います。山田さんのご活躍を、市民と共に楽しみにしています。本日はありがとうございました。